

神津 先生がこういう健診専門の病院をお作りになりたいというご意思がありましたら、著書などで知ってはいませんが、それが現実のものとして出来上がっているわけですね。須磨 はい。おかげさまで2年目に入りましたけど、受診者数もかなり増えています。

バイパス手術がアメリカで成功というニュースも入ってきて、この2つのニュースを聞いて、心臓も手術が出来るんだと知り驚くとともに、心臓は他のどんな臓器よりも命に直結しているから、弱った心臓を元気にする手術が出来たら、これこそまさに人助けになると思います。心臓外科に進もうと決めたんです。それで大学を卒業後に東京に出て、虎の門病院の試験を受けて入った

んですよ。神津 なるほど。須磨 ところが、当時の虎の門病院には心臓外科がなかったんですよ。でもまあいいやと。この機会に勉強しようと思つて、最初は消化器外科から始めて、その後4年間かけて脳外科も含めて全部の科を回ったんです。この時に胃がんの手術なんかもずいぶんやらせていただきましたから、その経験

があったので、後に世界で初めて胃の血管を使って心臓のバイパスをするということが思いつき、手術を成功させることが出来たわけですよ。神津 世界で初めて先生が成功させたという、その胃の血管を使った心臓のバイパス手術というのは、どのようなものなんですか。須磨 30歳の頃に留學していた時期のアメリカでは、狭心症や心筋梗塞に心臓の冠動脈のバイパス手術が非常に効果があると大注目をされていたんです。ただ、このバイパスに使う血管を体のどの部分から持つてくるかというところが問題で、クリアしなければいけない条件が3つあるわけですよ。一つ目は、本来の心臓の冠動脈と太さがあまり変わらないこと。二つ目の条件は、長さが20cm以上あること。三つ目が一番大事で、その血管を取ってきた元の臓器がその後も正常に機能していられるということです。首の頸動脈が太くてちょうどいいからといって、それを切つて持つてこようとしても頭に血が流れなくなるからそれはできない。だから条件が合う血管ってなかなかないんですよ。最初は脚の静脈を使っていたのですが、内臓が動脈系の血圧に耐えられず10年も、

# 須磨久善

撮影／阿部了  
取材・文／古原雅章  
神津善行のポテンシャルがあなたのリズム

【心臓外科医】  
生が心臓外科医になろうと思われたのはどういった経緯からですか。

須磨 もともと外科医になろうとは思っていたのですが、どの分野に進むか思案していた時に、世界で初めて心臓移植手術に成功したという大ニュースが世界中を駆け巡ったんです。同じ頃に心臓冠動脈

## ゴルフの時は手術のストレスから解放されるんです

経つと話まってくるという問題が出てきた。それで、やはり動脈には動脈でバイパスしないとイケないということになり、80年代の前半には肋骨の内側にある内胸動脈を使っていたの

すが、当時それ以外に使える動脈はないかというのが、世界中の心臓外科医にとっての一大テーマだったんです。そして80年代の半ばに、フランスのグループが首首の動脈(橈骨動脈)を使つてのバイパス手術に成功し、それと同時に僕が胃の血管(胃大網動脈)を使つて手術に成功したんです。これは先ほど言ったように、私が最初に消化器外科の経験があったので、胃の血管を使うという発想が浮かび、すぐに実行できたわけですよ。

うこと自体、私たち一般人の間にはちょっと想像が出来ないことなのですが、こういった手術はいつ頃から行われているものなんですか。須磨 心臓にメスを入れて切つたら血が噴き出してその人は死んじゃいますよね。でも心臓を止めるとそれでも死んじやいますよね。だから心臓は止まっているけど体は生きてるという普通はあり得ない状況が出来ないと心臓の手術はできないわけですよ。それを可能にしたのが「人工心肺」で、1953年にアメリカのミネソタ大学で初めて人工心肺を使つての心臓手術が行われました。この人工心肺の仕組

か使えなかったんです。ですから手術もその時間内でやらねばならなかったわけです。そこから改良が進み小型化され長時間使えるようになり、現在は一日がかりで心臓を止めて手術をしたって全然大丈夫ですよ。今、新型コロナウイルスの重症患者が、2〜3週間「エクモ」を使い肺炎がおさまって命が助かったというニュースをやっていますけど、あのエクモは人工心肺なんですよ。神津 現在の心臓外科の手術の発展は、人工心肺の開発改良があったこそなわけですね。須磨 おっしゃるとおりで、大変な進歩です。神津 その進歩の極致が心臓移植かとも思っていますが。

みは、静脈血を吸い込んで酸素を吹き付けて赤い血にして体に戻す、まさに心臓と肺の肩代わりをする装置なんです。最初的人工心肺はたった15分し

すま・ひさよし 1950年兵庫県生まれ。大阪医科大学卒業後、三井記念病院心臓血管外科部長、ローマトリック大学心臓外科客員教授、葉山ハートセンター院長などを歴任。心臓手術症例は5000以上で日本初のパチスタ手術を施行。海外での公開手術も多数。映画「チームパチスタの栄光」等の医療監修も行う。2021年に循環器、特に心臓に強い健診専門の病院「medock総合健診クリニック」を設立。



すま・ひさよし 1950年兵庫県生まれ。大阪医科大学卒業後、三井記念病院心臓血管外科部長、ローマトリック大学心臓外科客員教授、葉山ハートセンター院長などを歴任。心臓手術症例は5000以上で日本初のパチスタ手術を施行。海外での公開手術も多数。映画「チームパチスタの栄光」等の医療監修も行う。2021年に循環器、特に心臓に強い健診専門の病院「medock総合健診クリニック」を設立。

神津 もう一つ、先生は日本初のパチスタ手術を成功させたという功績をお持ちですが、心臓にメスを入れるとい

うこと自体、私たち一般人の間にはちょっと想像が出来ないことなのですが、こういった手術はいつ頃から行われているものなんですか。須磨 心臓にメスを入れて切つたら血が噴き出してその人は死んじゃいますよね。でも心臓を止めるとそれでも死んじやいますよね。だから心臓は止まっているけど体は生きてるという普通はあり得ない状況が出来ないと心臓の手術はできないわけですよ。それを可能にしたのが「人工心肺」で、1953年にアメリカのミネソタ大学で初めて人工心肺を使つての心臓手術が行われました。この人工心肺の仕組



すま・ひさよし 1950年兵庫県生まれ。大阪医科大学卒業後、三井記念病院心臓血管外科部長、ローマトリック大学心臓外科客員教授、葉山ハートセンター院長などを歴任。心臓手術症例は5000以上で日本初のパチスタ手術を施行。海外での公開手術も多数。映画「チームパチスタの栄光」等の医療監修も行う。2021年に循環器、特に心臓に強い健診専門の病院「medock総合健診クリニック」を設立。